

厳しい暑が続く沖縄にも、ようやく季節の移ろいを感じる頃となりました。10月とはいえ、日中にはなお夏の陽射しが残る一方、朝夕には心地よい風が吹き、空の高さや雲の表情にも少しずつ秋の気配が感じられます。

本号の表紙を飾るのは、安里瞳先生の作品「光る道のような」です。海岸を柔らかな光が照らし、訪れた秋の気配を感じさせる一枚となっています。

さて本号の巻頭は、「令和8年度（第48回）九州各県保健医療福祉主管部長・九州各県医師会会長合同会議」ならびに「九州医師会連合会第430回常任委員会」の内容を掲載しております。地域医療構想、医療・介護連携、有事における国民保護への対応、HPVワクチン接種率向上など、沖縄県のみならず九州全体で共有すべき重要な課題について議論が交わされています。

生涯教育コーナーでは、脳卒中後遺症に対するボツリヌス療法と経頭蓋磁気刺激（rTMS）療法を取り上げました。日々進歩する治療法について理解を深める機会となれば幸いです。

インタビューコーナーでは、北部保健所長・糸数公先生にお話を伺っております。

月間（週間）行事お知らせからは5題あり、10月8日は「骨と関節の日」とのことで、骨を「生命を育むミネラルの海」と捉え、その重要性について改めて考える内容を掲載しています。次いで、沖縄県における臓器移植の現状について、特に2026年に琉球大学が脳死肝移植施設に認定され、県内での肝移植が完結可能となったとのことです。骨髄バンク推進月間では骨髄移植の重要性と問題点、10月10日の「目の愛護デー」では眼を守る「なみだ」について、そしてピンクリボン月間に寄せた乳がんについての記事など、10月ならではの多彩なテーマが並びます。いずれも県民の健康を守る私たちにとって、日常診療と深く結びつく重要な課題です。

随筆では、医療の「術」から「道」へという視点から、心身医学について改めて考えます。

季節が移りゆくように、医療を取り巻く環境も日々変化しています。本誌が、会員の皆様にとって新たな知識を得る場であるとともに、県医師会の活動を身近に感じ、互いにつながる一助となれば幸いです。

広報委員 照屋 徹

